

『輝け！明星学園』の会

講演会記録

「明星の教育とは何かを自問しながら—29年間の実践を振り返る」

講 師 堀内雅人（中学校 副校長）

と き 2014年2月22日（土）

ところ 武蔵野公会堂 2階 第1・第2合同会議室

はじめに

堀内です。この4月で、早いもので明星に来て30年目を迎えることになります。よろしくお願いいたします。今日は私自身の自己紹介という意味もございます。レジュメに沿ってお話していきますが、第1部は「明星の教員になるまで」と題して、昔話をさせていただきます。その上で第2部の「国語の授業」、第3部の「中学校の職場体験・卒業研究を中心とした教科外活動」という2本の柱を立て、これからの明星についてというように流れを考えたのですが、時間的にとても難しいかと思います。第2部の「国語の授業」については、これ1本にしぼってお話しないと時間内にうまくお伝えすることができません。今日は簡単に触れる程度にして、また別の機会を頂いた時にということでもよろしくお願いいたします。

第1部 明星の教員になるまで

1. 明星赴任まで

私は東京足立区に生まれました。60年代、70年代を小・中学生としてそこで過ごしたわけです。近くには荒川放水路が流れていて、広い河川敷と土手が続いています。金八先生の舞台で有名になりましたが、その少し上流にあたります。今でこそ川の水もきれいで、河川敷もきれいに整備されていますが、当時は雑草が伸び放題、川にはあらゆるゴミというゴミが流れてくるといった様子でした。それはそれで、子ども心には面白かったように記憶しています。

小学校に入学すると、1年から学習塾に週5日通うようになっていました。しつけに厳しい塾で、畳の上に正座、げんこつはあたりまえ、女子であろうと全く容赦しないといった塾でした。でも、それが嫌だと特に思ったこともなく、それが日常になっていたんだと思います。

小学校5年になると毎週日曜日に、四谷大塚進学教室のテストを受けるようになっていました。そういう子がクラスに1人か2人ずついたように思います。ちょうど都立高校の人气が下がり、逆に私立の人气が上がってきた時代です。ただ、都心とは違って足立区あたりではやっとな関心が高まってきたかというような状態ではなかったかと思います。

結局私は私立中学1校、国立付属中1校を受験し、失敗、地元の公立中学校に進学することになりました。子どもの多い時代でした。1学年10クラス、教室が足りず、私のクラス1年10組はプレハブ校舎でした。ボンタンというんでしょうか、ぶかぶかのズボンにリーゼント、ブルースリーの影響でヌンチ

ヤクを忍ばせているやつも何人かいました。女子の一部には、くるぶしまである長いスカート、最近では映画でしか見ることのできない姿ですよ。でも、けっこうみんないいやつなんです。私の周りでいじめのようなこともきかなかったですし、楽しい3年間でした。ただ、私は参加しませんでした。他校とよく抗争のようなことがあり、今から思えば先生たちは大変だったんだろうと思います。そういう学校でも3年生になると月1回、学内で業者模擬テストが行われます。自分の成績が学校で何位か、東京都で何位かが毎回出てきます。それだけでなく、足立8中の学校別の平均点も出てきて、これが東京都で何位かもはっきりわかるわけです。毎回隣の江北中と最下位を争っている状態でした。

その後、私立の早稲田高校に進学しました。カルチャーショックでした。足立8中時代とは何もかもスタイルがちがいました。中学校からの内部生が大多数なのですが、どうみても自分より大人なんです。変な校則もないし、髪型も長髪が多い。休み時間の話の内容も違う。英語や数学は受験のために勉強してきているのでまだついていけるとして、文学や政治の話には全くついていけません。しばらくの間は、高校からの転入組で固まっていました。中学校時代はほとんど学年で1位だったのですが、一気に劣等生の気持ちをたっぷりと経験することになりました。この高校はもちろん早稲田大学と深いつながりがあるのですが、大学の付属になることを拒否していて、国立や慶応に進む生徒も多かったんです。私は将来の目標もなく、ただポカーンと高校生活を送っているような生徒だったものですから特に目指す大学も学部ありませんでした。成績も良くなかったのも、高3の時、国立文系コースにも国立理系コースにも入れません。特に文系が得意とか理系が得意ということもないので、私立に絞ることもできません。そこで数文コースという何とも中途半端なクラスに入りました。そんな中、友人の影響で本を読む面白さを知り、現代文の先生の魅力に触れました。ただ、進路については文系・理系さえ絞れず、結局文学部と医学部を受験するといった迷走をした末、1浪することになりました。

早稲田の国語国文に入ってから、それが運命と前向きにそれを受け入れました。教師になるのなら国語以外にはないというのは、以前からの選択肢の一つではありました。ただ、人の前に立つのは嫌い、目立つこともできるなら避けたい、人前で話すなんてとんでもないという人間でしたので、自分が教師になるというイメージはまだまだ漠然としたものだったように思います。

そんな時、塾講師のアルバイトを手伝ってもらえないかという話がまいこんできました。深く考えることもなしに引き受けてしまいました。持ったクラスは中学2年。1クラス20人定員です。19歳の時でした。生意気盛りの14歳が相手です。新米の若い兄ちゃんをからかおうというのがよくわかるんです。こちらは余裕がないので、馬鹿にされてたまるかという一心です。授業がうまくいくわけがありません。もちろん何人かの女子は若い男の先生というだけで、追っかけのように付きまとってきます。授業中も前の方の席で質問にきちんと答えてくれます。でも教室の後ろの子たちは、完全に斜に構えて、こちらからすると授業妨害と言いたくなる言動をしてくるんです。こちらも頑なになり、そいつらは相手にしない、きちんと授業を受けている前の方の子たちだけに向かって授業をする日々が続きました。それでいいとは、自分でも思っていないでした。自分は教師が向いていないなとも感じていました。ただ、自分から塾長にやめさせてくれというのは、それだけは嫌だという自分がいました。その代わり、塾長から「首だ！」と言われれば、潔く「ご迷惑をおかけしました」と、引き下がるつもりでいました。

そんなある日のことです。授業が終わり、荷物を片づけ外に出ました。建物の横には駐輪場がありました。そこに、いつもいわゆる悪ガキたちがたむろしているんです。その前を通らなければなりません。いつも足早に通り過ぎていました。ところがその日、突然ある女の子が近寄ってきて「先生！」と言うんです。いつも、授業をきちんと受けていない生徒の一人でした。初めてその子から「先生」と呼ばれたんです。「先生、なんで今日私を怒ってくれなかったの？」私には恥ずかしながら彼女の言っている意味が分かりませんでした。「どうして？」「私、授業中、後ろのドアから抜け出したんだよ。」気づいていなかったんです。それから「なんで怒ってくれなかったの」の本当の意味がやっとわかりました。「なんで私のこと見てくれていないの？」冷水を頭からかけられた思いでした。

その瞬間こそが、私の教師としての出発点だったと断言することができます。悪ガキだと思っていた子たちの繊細さに気づきました。「先生！先生！」と近づいてくる子たちの何十倍も、私のことを注意深く観察してくれていることにも気づきました。もちろん彼らの授業態度がその後急によくなったというわけではありません。でも、かならず帰りに駐輪場で私を待っていて、私にもっとこうした方がいいよとか、教室の中ではしない本音の話を素直に話してくれるようになりました。彼女たちはまさに私にとっての教師のような存在でした。

塾講師を大学時代 4 年間続ける中で、国語の教員になろうという気持ちが確かなものになってきました。中学受験・高校受験・大学受験を指導するわけですが、受験技術を指導するだけではなく、講師仲間たちと生徒について夜のファミレスで熱く語るといった日々もけっこうありました。その後、大学の教員になる者や有名な予備校の専任になる者も出ましたが、難しい生徒について、どういう問題を抱えているのだろうといったことを真剣に語り合う仲間たちでした。

大学を卒業後、1 年間早稲田の専攻科で国語国文学をさらに学びました。現場で教員をしている方も何人かいて大きな刺激を受けました。専攻科は夕方なので、午前中は城北埼玉高校で非常勤で高校生に古典を教え、夕方から専攻科の授業、曜日によってはそれから塾でアルバイトという日々でした。城北埼玉は完全な進学校で、昼休みにはよく予備校の関係者が職員室にやってきてスカウト行為を行って来ました。私のような新米のぺいぺいにも接待をしてくれたり、夏期講習の仕事を持ってきてくれました。90 分 1 コマが 10000 円、当時の学生のバイトとしては破格でした。受験指導については、経験を積みば積むだけのことはあり、大きな自信になってきました。ただ、どの学校に勤めるか、高望みするようになっていたのも事実です。

いくつかの学校から声をかけてもらいましたが、焦って決めるのはよそう、もう 1 年大学に残ろうと自分で決め、お世話になっていた先生のところにご挨拶に伺ったわけです。「今、声のかかっている学校はないのかい？もしないのなら、紹介してやるぞ」「明星学園から面接を受けてみないかという電話が入っています。でも中学校なんです。」「もったいねえぞ。採用試験、受けるだけ受けてみなさい。」

「もったいねえ」の意味について聞くことはできませんでした。ただ、最も信頼している先生の言葉でした。履歴書提出の締め切りが、翌日だったと思います。郵送では間に合わないため、「どのような教員になりたいか」といった課題の文章を、高田馬場の喫茶店で書き上げ、直接明星学園の事務所に提出しに行ったのを覚えています。実はそのコピーが数年前にでてきました。それが次の文章です。驚くことに今

の私の考えとほとんど変わっていないんです。30年間全く成長していないというか、深い部分では初めにできあがってしまっているのでしょうか、その後のお話と結びつくと思い、恥ずかしいのですが一部だけ抜き出してみました。

《・・・わが国はペリーの来航以来、常に他国による侵略の脅威を感じていた。西洋に追いつけ、追い越せということが国家的至上命令とされていたのである。そのような中で人々は立身出世を志した。漱石もまた、英国留学を通じて当時の知識人たちと同様に西洋合理主義を身につけて帰ってきた。英文学者としての知識は、今から考えると想像を絶するものがあったという。

だが彼はそこに満足できなかった。西洋合理主義や知識というものを人一倍尊重しながらも、それだけでは片づけることのできない何かを感じ取っていたのだ。それはつまり、心の問題である。他との間で起こったものを自分の問題としてどう捉えるかという、人間個々の倫理の問題である。人間というものを知性・立身出世主義という面だけで捉えること、また逆に、情操・心の面だけで捉えようとするのはたやすい。だが、その中間に立って、人間の持つ矛盾や不条理に目をそらすことなく直視したところに彼の偉大さがあったと思う。

現在の教育というものに目を移すとき、マスコミなどでしばしば取り上げられる問題に学歴社会、偏差値教育などといったようなものがある。これは、知識をつめこむだけで心の問題をおろそかにする時代風潮の現れではなかろうか。心の問題をおろそかにするということは、誤解を恐れずに言うならば、ものを考えないということである。ものを考えないということをさらに押し進めるならば、自分の行動に責任が取れないということである。・・・》

漱石には同時代の「自然主義」作家たちとは違う世界的視野を持ち、時代を読む目があった。だから苦しいんですね。「耽美派」の谷崎や荷風のように自然主義の現実暴露に反発し、美の追究に走ることもしない。明治という時代に真正面から向き合うわけです。青春小説のように言われる「坊っちゃん」にしても、けして明るい小説ではないですよ。まっすぐで世渡り下手の坊っちゃん、教頭に迎合することをせず自分の考えを持っている数学教師山嵐、坊っちゃんは江戸っ子であり、山嵐は会津です。合理主義的で人間関係に聡く、言葉巧みに人の心を操ろうとする教頭赤シャツと、まさに教頭の太鼓持ちの美術教師野だ。うまくいくはずはありません。最後の最後に坊っちゃんは、山嵐と協力して赤シャツたちを懲らしめるわけです。胸がすかっとする場面です。しかし、その後坊っちゃんはどうなったのでしょうか。山嵐はどうなったのでしょうか。作品の最後の部分で、寂しいその後の人生を予感させる記述があります。逆に赤シャツは出世街道を突き進んでいくでしょう。そういう書き方がされています。江戸・会津対薩摩・長州の構図です。漱石は薩長が主導する近代国家日本を単純に否定しているわけではありません。彼は避けることのできない事実としてそれを受け止め、それが行きすぎたときの日本を憂うわけです。作品を通して思考するわけです。どちらかに肩入れすることは簡単です。時代の波に乗ることができれば、その時代における名声は勝ち取れるかもしれない。でも、漱石は時代の潮流にある自然主義にも反自然主義にも与しなかった。だから普遍性を持ち得たのだと思います。

教育も、ある一つの立場に立つことは簡単で、だからこそ塾の教師は目的と結果がすぐにつながるわかりやすい世界でした。その中にいても葛藤している塾の先生たちはたくさんいました。学校教育というのは時代が変わろうと、その二つのベクトルを含みこみながら実践していくべきだということを未熟ながらに思っていたのだと思います。

話は変わりますが、明星の採用の面接というのが変わっていました。普通は数名の教員で 1 名ずつ面接します。それ以外は経験したことがありません。場所は小学校の職員室の奥にある会議室でした。大きな机を端っこに寄せ、壁際に 10 数個の椅子が並んでいます。つまり書類選考で選んだ 10 数人をいっぺんに面接して決めようとするわけです。乱暴な話です。男の先生たちはほとんど G パンです。それも机の上に乗かって胡坐をかいていたりします。面白い学校だなと思いました。もう 1 年大学に残る予定でいましたので、完全に当事者意識はなく、観察者になって楽しむ余裕がありました。G パンをはいた長髪の男の先生が「スキーやったことある？」国語の教員を採用するのに、どういう意味があるのだろうと思ひながら、順番にこたえる受験生の声を聴いています。私は列の最後尾、余裕があります。もう一つ、とても印象的な質問がありました。ベテランの国語が専門の女の先生です。「あなたが授業をするために教室に入っていました。ところがチャイムが鳴っているのに、生徒は席につかずに遊んでいるままです。あなたならその時どうしますか？」周りの先生たちがにやにやします。これは大変な学校なのかな？それにしてもこんな質問ができてしまうというのはおかしい学校だ。どちらかというと、私にはプラスのイメージでそれを聞いていました。一人ずつ答えていきます。「面白い授業を・・・」「生徒の目線に立って・・・」「授業だけでなく休み時間に生徒と一緒に遊んで・・・」そのたびに、にやにやする先生がいます。自分は同じようなことを言うのはいやだなあ、そういう気持ちがメラメラ湧き上がってきて、どうせ採用してもらえなくてもいいんだからと偉そうな答え方をしてしまいました。「そんな時に大きな声で叱っても無理だと思うので、教卓の前の椅子に座って、子どもたちの様子を 1 時間観察しています。」

私が面接官なら、そんな生意気なことを言う若造は選ばないかもしれません。実際 29 年教員していても、そういう状況になってそんなでーんと構えていられるような自信はありません。ただ、この学校はこういう答え方をどうとらえるんだろうなという好奇心がありました。冷静に見ていて普通ならこの人が選ばれるだろうと思われる女性がいました。選ばれるならその人か、まったくタイプの違う自分しかない、どちらを選ぶかによってこの学校がどういう学校かわかるというくらいある意味傲慢にとらえていました。でももしかしたら、選ばれなくてもショックを受けないように自分に暗示をかけ、防御していただけたのかもかもしれません。

ところが思いもかけず採用してもらえました。ただ引っかかっていたのは中学生しか教えられないということでした。高校生を教えたいという気持ちが強かったのです。当時校長であった依田先生に伺いました。「高校の授業もしたいんですが。」「あと 2, 3 年待ってくれば、中高の人事交流が始まるよ」その言葉で明星に勤めることを決めました。ただ中高に人事交流が始まったのは 2 年後ではなく、22 年後になりましたけど。

2. 明星着任時

明星に着任した当時は、受験教育で育ってきたのに、よく明星でやっていけますねと聞かれることが何度もありました。やっていけていたかどうかは分かりませんが、自分の中では何の矛盾もありませんでした。むしろ自分の考えてきたことが、明星の教育というものに会って、きちんと位置付けることができたくらいに思っていました。『小中学校時代は貴重な体験をたくさんさせる。授業は暗記中心ではなく、きちんと自分の頭で考えることを大切に、それを教室の中で交流、さらに自分の考えを深める。そういったことを通してすべての基本となる大切な学力を身につけさせる。』なんて高尚なことを、レベル

の高いことを要求しているのだろうと思いました。そのような基礎を身につけた生徒に、その生徒に見合った受験技術を必要に応じて学校とは違う場である予備校で与えれば、理想的なつながりになるのではないか。もちろん全員が国立や早慶を目指すわけではない。その生徒にあう進路を見つけることができ、どう進むかによって上下関係を作るのではない豊かな人間関係を育てる学園。それが初めて持った明星学園のイメージでした。実際教室にはびっくりするくらいの才能を持った生徒が何人もいました。勉強はできなくても、みんなから信頼されていて、なんていいやつなんだと思える生徒も何人もいました。

ただ、そのように明星学園に共感する一方で、違和感を持つこともありました。私こそが明星学園のことを知っている、愛しているといってくれる方たちはたくさんいたし、その方たちに支えられているという実感もありました。でもその中の一部の人の発言に首をかしげることもありました。さきほど、明星の教育は高尚だと言いました。それを現実達成するのは本当に難しいことだとも思いました。一人一人が大人にならなければいけない、厳しさが要求されると感じていたし、それが自由を謳う明星の魅力だと思っていました。

ところが、一部の人の、「明星なんだからいいのよ」「それも個性なんじゃないの」「受験勉強は子供たちの成長の妨げになる」という言い方が気になりました。私が思っていた厳しさとは校則を作るとか、大きな声で怒るとかそういうことでは全くありません。その子の可能性を信じて、妥協せずに要求するということです。明星の自由とはいったいなんだろう？個性とは教育で育つものなのだろうか？それとも何もしなければ育つものなのだろうか？だとしたら、教育とは何だろう？そんなことを考えていました。

そんな時に出会ったのが、原田満寿郎先生の「明星学園は柔らかな鍛錬主義の学校です」という言葉でした。「柔かい」と「鍛錬」という相対立する言葉を結びつけたところに明星学園はある。これほど自分の中にあつてうまく表現できなかったものを端的に表してくれた言葉はありません。そのことを思い出しながら、昨年文章を書きました。次の文章です。この言葉と出会うことで明星教育の中における伝統行事、八ヶ岳登山についても自分の中で位置づけることができたような気がします。

《・・・かつて、ある先輩の言った「明星学園は『柔らかな鍛錬主義』の学校だ」という言葉が、なぜか今でも私の心に強く残っています。「明星学園」と「鍛錬」という一見不似合いなつながりが、「柔らかな」という言葉をつけた瞬間、私の中でしっくりおさまりました。その当時の私は、明星のいう「個性尊重・自由・平等」が「鍛錬主義」と相反するものだといった常識に、ある違和感を持っていました。本当に「鍛錬」は「個性」をつぶすものだろうか？「個性」をみがくためにこそ「鍛錬」が必要な時もあるのではないかと。しかし、その違和感について語る言葉を当時の私は持っていませんでした。ただ、感覚として感じていただけです。「言葉」は、使われていくうちに手垢がついてきます。

「善・悪」「右・左」「新・旧」といったように単純な二項に分類され、与えられたイメージと引き換えに、その言葉が本来持つ大切な何かが失われていきます。言葉に意味が失われた時、それを使う人間の心もまた単純化されていきます。「鍛錬」という言葉には「根性」「管理」「苦しい」といったイメージがつきまといまふ。そのイメージと明星学園とは結びつきません。しかし、「個」を伸ばすために必要な「鍛錬」も絶対にあるはずでふ。「柔らかな鍛錬主義の学校」——この言葉は、私の明星学園に

対するイメージを最も端的に表す言葉であり、それは多くの先輩教員たちも私のこの感覚を共有してくれているのだという安心感を得たときでもありました。

中学校における八ヶ岳登山も、明星の伝統的な行事です。7年生全員が八ヶ岳最高峰の赤岳(2899m)に登るなどという学校はそうはありません。長野県在地元の中学校も多くは一泊の硫黄岳登山です。

「鍛錬主義」はここでも生きています。高山では自分の足しか頼るものはありません。もちろん、車もコンビニありません。立ち止まれば自分が遅れるだけです。ではなぜ「柔らかな」なのか？ 明星学園の登山が、山ですれ違う他の学校と異なるところがあります。他のほとんどの学校は、全員が1列になって歩いています。引率の先生はトランシーバーを手にし、集団が離れないよう連絡を取り合っています。それに比べて明星は、全員を登らせることは同じであっても、全体を10人グループ12班に分け、グループごとに教員が付きまします。子どもたちの体力はさまざまです。足の強さも一様ではありません。足の速い子に合わせるとグループは崩壊してしまいます。弱い子を先頭にし、体力のある子には全体を見る役割を与える。たった2泊3日であっても、そのグループの中では大きなドラマがあったり、成長があったりします。明星の教育・授業を象徴しているとも言えます。グループを引率する教員の力量も問われます。力量とは体力ということではありません。子どもたちの様子を観察する力、疲労の度合い、わがままの見極め、グループを「同質の個」の集団としてまとめるのではなく、「異質の個」を互いに認め合えるようにまとめようとする志向性。・・・》(ブログ『中学校の先生だより』2013.7.1)

私の1年目は、自由の森学園ができた翌年のことでした。一気に若い先生が入りました。元校長の和田さんと飯田啓介さんがベテランで学年にいましたが、担任の河住さんは専任としての1年目、平野さんは2年目、私と英語の姫野さんも1年目という若いスタッフでした。2年目には初めて担任を持つことになりました。

毎日のように授業研究と飲み会がありました。飲み会といっても先輩の教員たちが教育論を戦わせていて、時々「あんたはどう考えるんだ？」といった質問が突然やって来ます。禅問答のようなやりとりもしょっちゅうありました。正解のない質問です。

ある時飯田さんが、ガード下にある“豊後”という居酒屋で今でも忘れられないつばやきをしたんです。「たしか小林秀雄が書いていたと思うんだが」と切り出したんです。「個性なんて、教育で育てるようなもんじゃないんだよ」『自由の大切さ』『個性の大切さ』は多くの学校で教育目標に掲げています。明星においてはなおさらです。その本当の意味について吟味することなく、否定しようのない言葉になってしまっていたのではないのでしょうか。それがもう一つの違和感として私の心にありました。翌日私は『考えるヒント』にねらいをさだめ、さっそく書店で文庫本4冊を買い求めていました。『個性』をキーワードに斜め読みを始め、ついにその箇所を見つけました。

《・・・誰も、変わり者になろうとしてなれるものではないし、変わり者ぶったところで、世間は、直ぐそんな男を見破ってしまう。つまり、世間は、やむを得ず変わり者であるような変わり者しか決して許さない。だが、そういう巧まずして変わり者であるような変わり者は、はっきり許す。愛しさえる。個性的であろうとするような努力は少しもなく、やる事なす事個性的であるより他はないような人間の魅力に、人々はどんなに敏感であるかを私は考える。と言うのは、個性とか人格とかの問題の現実的な基礎は、恐

らくそういう処にしかない、これを掴まえていないと、問題は空漠たる言葉の遊戯になるばかりだ、と思えるからである。・・・》

この言葉に救われたのは二度や三度ではありません。その度ごとにその時の自分や状況に引き寄せて考えることのできる不思議な言葉でした。

もう一つ、印象的なエピソードをお話しします。1年目の、ある職員会議でのことでした。私がたまたまその日の日直だったため、会議の議長を務めることになりました。議題は卒業式。アンサンブルの演奏を入れるかどうかということです。運営委員会の案は、「式はできるだけシンプルにするべきだ。アンサンブルを入れない。」それに対して反対意見は「それでは、さみしいでしょう。」自由の森と分かれた直後です。今から思えば主張が極端になっていたような気がします。最後は採決に入ります。声の大きさは、運営委員会提案の方が圧倒的でした。挙手をしてもらいました。何と賛否同数だったんです。その瞬間「議長判断！！」ちょっと待ってくれよという感じでした。こちらは学園のことを何も知らない1年目の新人です。運営委員のメンバーは各学年の学年主任を初めとする、まさにそのときの学園をリードしている先生たちでした。頭では運営委員会提案に賛成した方がいいだろうという考えが一瞬よぎったのは確かです。ただ、そういう政治的判断を見透かされているのではないかという思いもよぎりました。パッと出てしまった答えは「反対です。」一番素直な答えが出ました。ただ単純に、アンサンブルが入った方が厳かでいいなと思っただけです。その瞬間、いつも職員室ではなく、一人国語科研究室にこもっていて、それでいて一目置かれていた佐伯先生が「よし！」と大声で応えてくれたのを覚えています。運営委員の先生たちもなぜか明るく笑っているんです。何だろうこれは、と思いました。

後から考えてみると、どちらの主張にも理はあったのだと思います。うわべを飾ることだけに目がいてしまうと本当に大切な本質的な部分が見えなくなってしまう。表面を取り繕うことでごまかすなという視点は、とても大切なことだと思います。ただ、極端すぎるなという思いもありました。両極を見据えた上で、どちらが正解ということではなく、その時、その状況ではどちらを選択するかということなのではないか、だとするならば理屈の正当性よりも直感の妥当性の方が優位なときもあるのではないかと思います。ただ、そのように言葉で言えるようになったのは後のことで、当時は自信がなく、AかBかその度に悩み、揺れ動く自分自身にこれでいいのか、いやそれでいいんだ、でもちがうかといったように迷う日々だったのだと思います。

今回、ここでお話をするということで昔のノートを引っ張り出しました。当時さまざまな本を読みながら、心に引っかかる文章を抜き書きしていたんですね。私の20代、何に悩んでいて、何をよりどころにしようとしていたのかがみごとに覚えてくる気がします。そして、今まで明星の国語の教員としてやってこられた、最も大切な部分をこれらの言葉が形作ってくれていたのだと改めて感じることができました。〈資料集2 ページc・d・e〉

一つの処方箋ができたとき、人は処方箋どおりに行動しているかどうかをチェックし始めます。そのとおりに行動すれば責任は問われない。でも個々の生徒を見なくなります。現代という時代は、変わり者

を認めない、まさに非寛容な時代、学校にとって厳しい時代です。学校とは意味のある失敗をさせる場所、意味のある挫折をなるべく早く経験させる場所。自分の責任を回避しようとするとき、子どもたちの成長のきっかけになる大切な活動を、リスクをなくすと称して、減らしていくことになるでしょう。明星はそういう時代の波に、常に対抗してきたのだと思います。

先輩の先生たちからは、本当に両極の主張を聞きました。よく喧嘩している姿を見ました。一人一人が自分の教育に対する考えを持っていました。それは本当に豊かな空間だったのだと思います。安易に常識的な正解を学ぶのではなく、自分の頭で必死に考えざるを得ない場に身を置くことができました。そのようにして私は明星の教員になっていったのだと思います。

第2部 国語の授業（時間の都合で今日は割愛し、また別の機会にお話しできればと思います。）

第3部 教科外活動

1 教科外活動を考える前提

教科外活動を考えるとき、その前提として「生徒の現実をどう見るか」ということが重要になってくると思います。今目の前にいる子どもたちがどのような背景を抱えていて、彼らの成長にとって壁となっているものは何か、それを現場で共有できているとき、一つの取り組みがダイナミックなものとして立ち現れてくるのだと思います。

最近気になるのは、すぐに「好き・嫌い」「得意・苦手」を口にする子どもたちです。それを「個性的な子」「こだわりのある子」という言い方で正当化していいのかという思いがあります。ただの食わず嫌いなのではないか。努力もしないで、めんどくさいというだけで逃げているだけなのではないか。それを自主性という言葉ですますのではなく、遅くとも中学校段階までには、ある意味強制的であってもほんものの出会い、ほんものの経験をさせてあげる必要性を感じるのです。子どもの可能性を信じて、妥協せずに要求する。もちろん強制的と思わせては失敗だし、大変でもやり遂げた後の達成感を味わわせてあげることができなければ全く意味はないと思っています。

中学校に入学してきたばかりの生徒をながめると、「家庭」「学校」「小グループの仲間」といった小さな世界で満足、あるいは束縛されている生徒がたくさんいます。自分の世界を広げることに臆病になっているんです。いくつもの要因が考えられます。不安な親、必死で余裕のない大人たち、失敗や批判を怖れる学校、家庭と学校とをそのように追い込む社会。「子どもの個性を尊重する。」否定のしようのないその言葉が、家庭にとっても学校にとっても、実は子どもの現実から目をそらすための体のいい「逃げ」になってしまっているのではないかということを自戒をこめて考えます。でもそこにこそ、今必要なものが隠れているのではないのでしょうか。さらにネット社会の仮想現実。もちろんそこを入り口に自分の世界を切り開くことはできます。ネットとはそのための便利なツールです。しかし、本物の現実の素晴らしさと怖さとを知らないまま、目の前の人間関係の鬱陶しさを感ぜずに済ませるためにネットの世界に入ってしまったとき、そこには何が待っているのでしょうか。

「親でも先生でもない大人との出会い」これをテーマに、今日お話しする職場体験と民泊の行事が生まれました。他者と出会うことで初めて自己を認識する。ならば出会う「他者」は本物であってほしい。

自然であっても、人間であっても。それが子どもが大人へと成長するための現代の「通過儀礼」になりうるのではないかと思うのです。

2 教科外活動をどう位置づけるか

当然のこととして学校教育は、教科教育と教科外教育の二本の柱で成り立っています。その教科外教育を便宜的に「学校として全員に課す行事」と「自治的な力を発揮させる行事」とに分けて考えてみました。どちらも最終的に目標とするところは同じですが、個別の行事の目標を考えるときははっきりと区別し、特に中学校段階では前者の行事の必要性を強く感じるのです。それがうまくいったとき、高校段階ではより高いレベルでの自治的な活動ができるようになるのではないかと考えます。

自立していない弱い個（中学生段階ではあたりまえです）が、一人になる恐怖感から逃げるためだけに寄り集まった集団、考えることが嫌で、ただその時楽しければいいというだけで集まった集団を“群れ”と仮に呼ぶなら、彼らに必要なことは一人になることを経験させ、そのことが決して寂しいことではない、むしろ他者とつながることのできる自由を獲得するために必要なことなのだという実感を持たせることです。八ヶ岳登山は集団登山だろうと思われるかもしれませんが。確かに登りはじめは、おしゃべりをしながら登って行きます。しかし、頂上に近づくにつれ無口になり、黙々と登って行きます。「疲れた！」と声を出すことすらしなくなったとき、不思議な気持ちになっていることに気がつきます。資料集2ページにある文章は、そのことを象徴的にしるしたものです。頂上に着いたときには、再び歓声が上がります。その時の集団は、以前の“群れ”とは違っている。もちろん山に一回登れば人が変わるとかそういうことを言いたいわけではありません。象徴的な意味で成長するとはこういうことなのではないかと思うのです。群れただけの集団をあえて解体し、個を追求させることで異質を認め合う集団ができる。そういう視点で子どもたちを見たときそれに応えてくれている彼らの姿を発見する、教師冥利に尽きる経験を数え切れないほど経験させてもらいました。

もう一つの行事のグループ。運動会や学園祭・合唱コンクールですね。実は同じことを逆の言葉で説明しているだけなのだと思います。群れていてもしっかりと結びつきはできていない、グループから仲間はずれにされることを必要以上に怖れて、空気を読みながら要求されてもいないのに馬鹿なことをしてしまうような弱い“孤”、孤独の“孤”ですね。そういう小グループ（現実には楽しそうに見えたり、本人たちが意識していないこともあるのですが）に所属している子どもたちというのは、そこに居場所を作ることに汲々としていて、他者に対する想像力が働きません。被害者意識ばかり敏感で、自分もまた他者を傷つけることがあるということには鈍感です。そして友達関係の不安定なグループはどうわべの関係を強固にするために排他的で内向きな群れになっていきます。そんな群れを解体するためには、もっと大きなクラス集団での取り組み、さまざまな価値観を持った者同士、嫌でも同じ方向を向いて一致団結しなければならない祭を経験させる。もちろんそれが好きな子はいます。しかし嫌いな子もいます。でも、クラスの優勝のために力を合わせなければならない。昨日、実は杉並公会堂で中学校の合唱コンクールがあったんですが、コンクールの前などは、必ず対立が生まれたりします。一生懸命に取り組みたい生徒と、そこに乗っていけない生徒。涙はコンクール前はつきものです。でも本番までには何とか形になります。でも、これは期間限定だからこそ意味があるわけです。これを日常にしてしまつては、ノイローゼになる生徒が続出するでしょう。独りよがり、ひ弱な“個”に集団性を追求させることで、他者を認

め合う個に成長させる、そういう道筋も描けるのではないのでしょうか。



3 職場体験

職場体験は、2006年度6・6制がスタートした年に入学した生徒が8年生となった2007年から始まりました。6・6制移行にともない、中学校の5日制は6日制へと切り替えられました。教科時間数も英語・数学・国語を中心に増やされました。でも、それだけでいいのだろうか。かつて5日制を小中学校で選択したのは、労働条件の問題だけではなく、子どもたちを社会や家庭に戻そう、子どもは家庭と学校、さらに社会がバランスよく役割を果たすことで健全に育っていく。そのような考えによるものでした。それはつまり、学校教育が担わなければならないことをはっきりさせ、その責任をしっかりと果たす。そういう宣言でもあったわけです。しかし、社会はまだ未成熟でした。家庭も6日制を望む声が多かったのだと思います。新体制に向けて教科外活動に関する提言を行う立場となった私は、学校が当面、社会が行うべき教育をコーディネートする役割を担わなければならないだろうということを主張、具体的に「職場体験」を提案したわけです。

同じ学年スタッフに、高校から異動してきた体育科の安部さんがいました。私の提案が実現したのは、彼なしには考えられません。彼は高校ですでに「インターンシップ（職業体験）」と称し、有志の生徒を対象に進路指導に絡めた実践を行っていました。フットワークよく保護者に協力を求め、体験職場を見つけていってくれました。しかし、常にどこか違和感がありました。私のやりたいのは「職業体験」ではなく、「職場体験」なのです。14歳の生徒に経験させたいのは「親でも教師でもない大人との出会い」。大人が最もその人らしく輝いているのは「職場」にあるのではないかと。そんな素敵な大人のいる職場に行かせてあげたい。高校卒業を前に、進路に悩む17歳とはおのずから違うわけです。中学校の教員1年目の安部さんとはいろいろ話をしました。たぶん周りからは、堀内と安部とが良くも悪くも一丸となって突き進んでいたように見えたかもしれません。しかし、同じように見えながら当初私の一番遠くにいた

のが安部さんだったのかもしれませんが。にもかかわらず、彼は私の考えをよく聞いてくれました。「分かった。その思いを文章に書きなよ。」それが、資料集 2 ページにある『職場体験の実施にあたって』の文章です。また、『職場体験ハンドブック』を作成、冒頭にその文章を載せることを提案、ハンドブックの表紙には「出会い」と記してくれました。

5 日間の職場体験から帰ってきた生徒にはレポートを課しました。保護者の方、職場の皆さんにもアンケートを取り、冊子としてまとめることができました。そのレポート集を読みながら、自分はこれを求めているんだということを再確認することができました。今でも覚えているレポートがあります。保育園に行った女子生徒の文章です。彼女は一日目、二日目、不満をもらします。「なんでこの保育園の先生たち、私に気をつかってくれないの？」子どもというのは、大人に常に何かしてもらえる立場にいる者のことなのかもしれません。家庭では親から、学校では先生から。しかし 4 日目、あることに気がつきます。「自分はここでは生徒じゃないんだ。ここでの生徒はこの小さい子どもたちだ。じゃあ、私は？この子たちにとっては先生？」そのことに気づいた瞬間、彼女の見る世界が変わります。「こんな未熟な自分がここにいて、迷惑かけているのにこんなに気をつけて私のことを見ていてくれる。」保育園の先生が変わったのではありません。彼女が変わったのです。何かをしてもらう立場から、何かをしてあげる立場へ。何かしてもらう立場に安住している限り、本当の満足は得られません。まだ足りない、もっと……。しかし立場を入れ替えて相手の心を想像することができるようになった時、小さな一つの変化さえ、かけがえのないものに見えてきます。14 歳とは「つまらない」が口癖になる時期でもあります。この変化こそが子どもから大人への成長を象徴しているように思えるのです。

このようなドラマが生まれるのは 5 日間だからこそです。2・3 日なら楽しいだけで終われるかもしれません。5 日間の中ではおそらく壁を越えなければならない瞬間が来ます。そこで大事なのが「一人」でそこにいるということです。そこには親も先生もいません。多くの職場は二人ずつ割り振りますが、日常の友達関係ではペアは組ませません。あえて普段一緒にいない者同士を組み合わせます。誰かを頼れない、自分で考え行動しなければならない環境を作ります。職場の方には本当にお世話になっています。

そんな中、今年度も 11 月に無事実施することができました。私は現在現場を離れていますが、いくつかの職場に挨拶に回り、そこで働いている子どもたちの姿を見てきました。また、彼らの書いたレポートを読み、職場の方の声もいくつか聞くことができました。これは「伊勢音」という、アメ横にある江戸期創業で和の食文化を頑なに守り抜いている乾物屋さんの専務の方から頂いた手紙です。「……実際に大学生のアルバイトや沢山の職場体験の学生さんを見ておりますが、このたびの 2 人に関しては、礼儀もあり最高の中学生であったと思っております。特に女子生徒の笑顔と呼び込みの声、お客様への対応の姿は完璧に近く、申し分のない生徒さんだと確信しております。世の中でもこのような素晴らしい感性と素養のある方は、めったに見かけることがない水準と思います。これも明星学園の教育の賜物と思い、……」ここからは少し読むのが恥ずかしくなります。ここで申し上げたいのは、この生徒がレポートでどう書いているかということです。一部分だけ紹介します。

《私は人見知りです。だから知らない人に自分から話しかけることはまずできません。しかし私の職場は大きな声を出し、お客さんに商品を売らなくてはいけない乾物屋でした。知らない人に自分から話し

かけなくてはならないと1日目の朝に知って、これから5日間私はどうなるのかと気が重くなりました。

そのように始まった職場体験。思った通り1日目、私は役立たずでした。寒い中外に立ちっぱなしなのは辛かったし、勇気を出して話しかけても気づかれず、そのたびに傷つきやめたくまりました。その分売れた時は嬉しかったし、話しかけて来てくれるような人々がこの世界にいることに感激しました。

そして次の日、重い足をひきずって私は職場に行きました。職場の皆さんは優しくちょっとは慣れてきたけれど、やっぱりこの仕事は私に向いてないと思いました。そんな時私は商品を売る以外に商品を作る仕事もやらせてもらいました。それは鯉節の袋を閉じるというものです。私は同じことを繰り返しやる仕事が好きなので喜んでやりました。その仕事をしてみて「この職場体験は『本当の仕事と同じ』なんだ」と思い、私の中で何かが変わりました。仕事内容は鯉節が入った袋を機械で閉じるという単純なものです。私が驚いたのはそのあと、中学2年の子どもが閉じた袋がそのまま店に並んだことです。それを知ってこの仕事は遊びではないのだと確信しました。それから私は職場の皆さんの真似をして大きな声をだすように頑張りました。そうして3日目、4日目と過ぎました。・・・》

自分のことは自分が一番よく知っているというのは、必ずしも正しくはありません。人は他者と会うことで自分の輪郭をつかんでいくのだと思います。そのためには子供騙しではない“ほんもの”との出会いが必要になります。自分が苦手だと思っていたものと真摯に向き合うことで、新たな自分を発見した、そんな生徒の文章がたくさんあります。今年度の体験レポート集が後ろに展示してあります。どうか手にとってご覧頂ければと思います。

4 卒業研究

中学校での「卒業研究」の取り組みも来年で20年目になろうとしています。9年生全員が自ら研究テーマを考え、論文を執筆、学年全員の論文集を仕上げようというところから始まりました。私がこの取り組みを提案したのも、生徒の日常を見ていてのことでした。ほとんどの生徒が内部進学する明星学園において、中学校3年生での受験勉強というものはありません。公立中学校の生徒にくらべて、自分の時間はたっぷりあるはずです。しかし当時、その時間を持て余しているように見えた生徒がたくさんいました。クラブもやらず、下校時間ぎりぎりまで何の目的もなく過ごしている。私はおしゃべりが無駄だという気持ちはまったくありません。ただ、彼らの様子を見るにつけ、本当にそれが楽しいのかな？ 本音で語り合っているのかな？と思うことがしばしばありました。それでいて、その一人一人の中には興味関心やこだわりがしっかりあり、テストの成績の良し悪しとは関係なく可能性のようなものを感じていたのも事実です。ただ、総じて自信がない。心に秘めているだけで学校では話していない特技のようなものもある。なんてもったいないのだらうと思いました。「自分はこういうことが好きなんだ。」「私は昔からこういうことにずっと疑問を持ってきたんだけど、どう思う？」「当たり前になっていることだけど、よく考えるとおかしくない？」「なぜ・・・なんだろう？」そんな言葉が生徒同士の間で、生徒と教員の関係の中で飛び交うようになったら、なんて素敵だろうと思いました。そして、生徒への働きかけさえうまくできれば明星なら絶対にできるだろうとも確信していました。

テーマを生徒自身が見つけるということに関しては、それを担当する教員の立場からすればそう簡単に受け入れられるものではありません。教師といえども全てにおいて専門家であるわけではありません。

文章を書く、論文を書かせる専門家でもありません。にもかかわらず、20年近くにわたって全ての中学校の教員が毎年協力してくれているという現実が学校としての大きな力です。私は担当教員の最も大切なことは、良い聞き役であることだと思っています。まず、相手の興味関心を聞いてあげること、何を人に伝えたいのかを引き出してあげること。そのように感じることは素晴らしいことなのだと言葉を与えてあげること。職場体験と同じです。立場が入れ替わるのです。ふだん教えてあげる立場の教員が、教えてもらう立場に変わるのです。わからないこと、説明が足りないところは、何も知らない先生に分かるようにもう一度調べなおしてきてと、はっきり言います。そのようなスタンスだからこそ、どのようなテーマでも一対一で生徒と楽しく話げたのだと思います。

それからさまざまな変遷がありました。いろいろな生徒とのドラマもありました。それらをお話ししながら「卒業研究」の意味について語りたいところなのですが、残り時間がなくなってきてしまいました。これもまた別の機会をいただいてということですのでよろしくお願い致します。申し訳ありません。

先月、今年の9年生の「卒業研究発表会」が行われました。2年前から、9年生は論文を書くだけではなく、全員が一人ひとり下級生・保護者・一般参観者の前でプレゼンテーションを行っています。今年もいくつもの素晴らしいプレゼンがあり、参観者の方からお褒めの言葉をいただきました。

8年生はすでにテーマ探しの準備に入っています。来週は8年の4つの教室に大学の先生がやってきてくれます。「テーマをどうしぼっていくか?」「論文執筆にいたるまでの研究方法」などを説明していただく予定です。これらの先生方は卒研をサポートしてくれる明星の保護者の方々です。大学の先生だけではなく、各分野の専門の方にも協力していただいています。多くは小学校の保護者の方なんです。自分のお子さんの数年後を想像しながら、中学校の実践に関心を持っていただき、協力して下さる。ありがたいことです。と同時に、明星の文化の豊かさを感じます。

小学校では昔から前期で「みいつけた」の実践があります。6年生では「卒業論文—12歳の主張」の取り組みがあります。高校でも来年度の12年生からついに論文を書かせようという動きがでてきているようです。

5 おわりに

今、まさに学園が12年一貫のゆるやかな研究体制の確立に向け、確実に歩み始めているのを感じます。地域との協力、大学等研究機関等の連携、社会に開かれる学校。前回の河住校長の講演で提示された学校像に、私は全面的に賛成します。明星学園は自由になるための学校である。明星生はしっかり勉強する生徒でなければならない。必要なことにはしっかりと向き合わせ、体験させる。それでこそ個性は磨かれる。現場の先生たちは毎日夜遅くまで残って仕事をしています。それでも終わらず、家に仕事を持ち帰っている状況です。彼らのつくりだす貴重な実践をつなげ、外部へ発信していくことも現場を離れた私の役割ではないかと思っています。今日の講演がそんな明星の現在を、卒業生・学校関係者の方々に知っていただく良い機会になってもらえれば本当に嬉しく思います。ちなみに3月には和太鼓部・音楽部・アンサンブル部の定期演奏会が続きます。どれも非常にレベルの高い演奏を聞かせてくれます。明星の子どもたちの一生懸命な姿を見ながら、きっと明星のすごさを感じてもらえると思います。お時間があれば、是非足をお運び下さい。最後までお聞きいただき、本当にありがとうございました。

◇（資料）20代の頃、出会った言葉

b. 小林秀雄『考えるヒント』より

《誰も、変わり者になろうとしないものではないし、変わり者ぶったところで、世間は、直ぐそんな男を見破ってしまう。つまり、世間は、やむを得ず変わり者であるような変わり者しか決して許さない。だが、そういう巧まずして変わり者であるような変わり者は、はっきり許す。愛しさえる。個性的であろうとするような努力は少しもなく、やる事なす事個性的であるより他はないような人間の魅力に、人々はどんなに敏感であるかを私は考える。と言うのは、個性とか人格とかの問題の現実的な基礎は、恐らくそういう処にしかない、これを掴まえていないと、問題は空漠たる言葉の遊戯になるばかりだ、と思えるからである。》

c. 中沢新一『悪党的思考』より

《彼には清いものもいかがわしいものも、いっしょに平気で飲みこんでしまえるような、とても自由な精神を、私は感じるのです。……かたよりのない心というか、ひとつの極端からもうひとつの極端に一気にとびうつることができて、どの瞬間にもふたつの極端のちょうど中間地点に静かに立っていられるような精神というか、とにかくそういう精神を実現するのは、とても難しいことだけれども日本の宗教者はいつもそのことの実現を理想にしてきたはずなのです。それが精神の自由ということだろうと、私は信じているのですよ。》

d. 山崎正和『「世阿弥」特別インタビュー』より

《生きる上でわたしが一番ホッとしているのは現代かもしれないと思うんです。例えば、わたしは長い間、〈やさしさ〉というのは、決して甘いということではなくて、もう少しいえば、つかず離れずということなんですね。非常に強い心がないと、つかず離れずということはできないんですよ。無関心というのは離れちゃうことですね。密着ということは甘えているんです。甘えと無関心の両極を排した真ん中に〈やさしさ〉があるというのが、わたしの考え方なんです。よくたとえに使うんですけど、〈やさしさ〉というのは、人をなでるということなんです。強くやったら、ひっかくことになるんですね。もっと消極的になれば、手も出さないということになる。なでるということは、相手と接触しながら、そこに、ある自己抑制がある。それが演劇だとわたしは思っているわけです。……どんな芝居だって様式はあります。様式というのは、あるメッセージを一つの慎みと作法に従って伝えるということなんですね。その姿勢そのものが、わたしは〈やさしさ〉だと思うんです。〈やさしさ〉の根本には非常に冷たいものがあるかもしれませんが、でも燃えるものもないと〈やさしさ〉にならない。だから、燃えるような冷たさっていうのが、〈やさしさ〉の原点だと思うんです。》

e. 岸田秀『嫉妬の時代』より

教育というものに、どのようなものであれ明快な処方箋を求めることが、そもそも教育を歪めることだと思っています。どんなことに関しても言えることですが、明快な処方箋を欲しがるのは、それ以上、ものを考えたくない思考怠慢、一種の奴隷根性です。

どんなやり方にもプラスとマイナスとがあります。そしてそのプラスとマイナスの割合は、個々のケースで大いに違ってくるのです。この場合、この生徒に対して、この問題についてどうすればよいかの一般法則はなく、その場その場でいちいち考えなければなりません。そして、このやり方がいいと考えて実行し、その結果に自分が責任を負わねばなりません。

考えることを回避し、責任を負うことを回避しようとする者が、明快な処方箋を欲しがります。